

「さんか・さろん」ニュース

4月17日開催

「“地名”にこだわると地域がみえてくる」
～ご縁の國、出雲での全国地名大会もご案内～

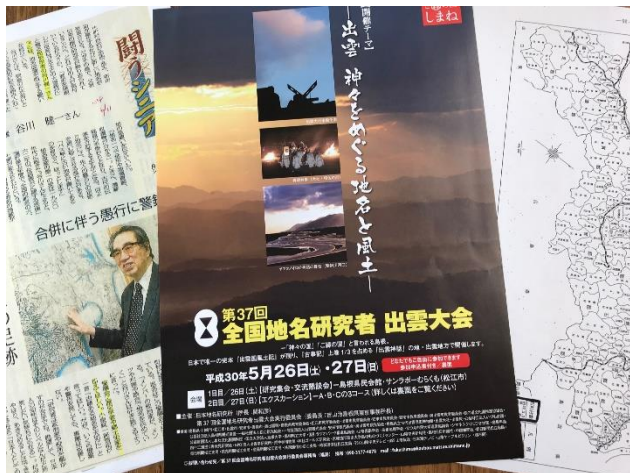
講師：吉山 治さん（島根県東京事務所長）

5月26日に出雲市で開かれた第37回全国地名研究者出雲大会の実行委員長を務めた吉山さん。この日はその島根県からスタート、地名に関する多様なお話をうかがいました。

私は郷土史家とか研究者ではありません。いろいろなご縁があって地名大会の実行委員長をしております。ずっと公務員で、県職員、そして国家公務員も12年ほどしておりました。直前は松江市の副市長で、市町村の職員も計5年経験しております。仕事の中で、地名との縁が出来たということはありません。

◆歴史文化を踏まえた地名を

地名研究者全国大会は、主催は川崎市にある日本地名研究所というところなんです。遡ると平成14年、平成の合併が始まっていろんな議論があった頃、当時の所長・谷川健一先生の記事が私の眼にとまりました。地名について警告を発していたのです。新しい自治体が出来るときに、当然名前を付けるのですが、結構ひらがなやカタカナの名前が流行っていました。「本当にそれでいいのか、名前はきちんと歴史文化を踏まえたものにすべきだ。いろんな人の議論を踏まえた上でつけなさい」と。私は非常にそれに共感して、研究所を訪ねていったのがこの地名研究大会につながる最初の出会いでした。



自分の故郷を例に話をしますと。出雲の国というのは『風土記』の頃からあり、8世紀の頃の出雲という地域には9つの郡があった。それが戦後昭和22年頃の島根県には市が3つ、町が28、村が218で249の市町村がありました。これが昭和の合併で249から59市町村にされます。その後、平成の合併によって59市町村が19市町村に。そういう合併を経て再編されていくわけです。このへんが地名にも非常に影響しています。例えば出雲の国の9つの郡のひとつで大原郡。『出雲国風土記』に書かれている地名ですが、平成の合併でなくなりました。

◆合併で新しい地名ができるときは

私は2年間合併協の職員でした。雲南市の名が決まるまでにいろいろありました。新しく合併して市になるタイプの合併ということで、また出雲の国で古くからある地域でしたので、非常に大きな議論がありました。

合併というのは地域の将来を考えること、特に自治体の名称、新しい地名については、若い世代、子どもたちの意見を聞きたいと思いました。当時雲南6町村には32の小中学校がありました。それを回って、合併はどういうものかという地方自治の授業をし、名称に関心を持って応募して下さいと説明しました。

子どもたちが一番多く支持したのはさくら市ですね。斐伊川の土手に桜並木があり日本の桜100選にも入っています。珍しい黄緑の桜もある。大東という町も一緒になったのですが、この町のマークがもともと桜。桜の名所が沢山あるということからでした。ただ桜の名所は全国各地にあり、既に「佐倉市」は千葉県にあり、ひらがなの「さくら」は栃木にできました。

また、出雲の国の南に位置するので、名前をつけるときのオーソドックスなつけかたで、南出雲市というのも

ありました。雲南をひっくり返した言い方で南雲という言い方も。奥出雲も。

最後、決選投票になったのは、雲南か南雲でした。合併の場合は全会一致主義なので、とにかく反対がある限りは決定出来ないというルールでしたから、話し合いを重ねて最後は雲南で決まったわけです。

◆『出雲風土記』が残る土地だから

今回の地名の大会を島根県、出雲でやることについて、これはボランティアで実行委員会を作って、1年半位前にやろうということになったのですが、みんなが直感したのは「島根では出来るんじゃないか」と。それはやはり『出雲国風土記』があるからでした。

713年に天皇から、各地で郡とか郷にいい名前をつけなさい、山川原野の名前の由来を報告しなさい、特産品を報告しなさい、古老の言い伝えを報告しなさい、という命令が出ます。そして733年に『出雲国風土記』ができています。これは全国で作られたのですけれども、多くは残っていないんです。でも出雲ではそれがほぼ完全に近い形で残っていて、今残っている地名と、昔からあった地名の比較対象が出来る。昔から残っている名前が沢山ある地域という事で、島根県は郷土史家、歴史文化の好きな方が多い、特に出雲は多いです。やっぱりそういう土地柄だから大会は出来るのではか。というわけで頑張っています。

◆地域を誇る手掛かりとして地名が

最近隠岐で一番有名なのは海士町というところなんです。これは先般国勢調査をやった時に島根県の市町村で一番人口が減らなかったところ。増えたのが出雲市、あとは全部減りました。Iターンの人がたくさん来て、奇跡みたいなことを起こした。その海士町。これは海の士と書く「海士」なんですけれども、これはやっぱり律令制の8世紀の頃から「海士」という言い方はありました。古い木管が残ってありました。ただ海に武将の武と書く「海武」でしたけれども。そういう名前ですと一つの島で自立しようと頑張っている。

海士町の成功理由は、郷土への誇り

があると思います。この島は自分たちが守るという、そういう地域性が海士という古くからある地域にはある。名前も含めてです。そういう意識がこの海士の今の頑張りにも影響しているのではないかと思います。

東京にいと人口減少社会というのを忘れるぐらい人がいるし、今でもまだ人が集まっています。しかし地方はさらに厳しくなっていく、人口減少社会になっていきますが、それを乗り越えていかないといけません。やっぱり今、頼らなくても自分でその地域の維持ができる、そういう地域づくりをしていかなければならないということが大切でしょう。それを例えば隠岐の海士町などがリーダーと、Iターンの人をうまく活用しながらやった。

産まれたところとか、住みたいところを好きになって、その歴史とか人とか、いろんなものを学んで愛着がわいて、それがいろんな行動につながる。そういうふうを考えていくと、やっぱりもっと地域のことを知るために歴史を学ぶために、その身近な手がかりとして地名があると思います。自分たちが好んでいる地域の地名を調べるといろんなドラマがある、それを知って親しむと、誇りに繋がっていく。地名から、もっと我々の故郷を持続可能なものにしていけるのではと考えます。

.....
身近にある地名ですが、今まであまり興味を持たなかったのが正直なところなんです。このあと、「新宿は」「中野は」「四谷は」「麻布は」??などと各人の話題は膨らんだのでした。地名から地域を知り、誇りを持ち、維持していく。納得のいったお話でした。(事務局・野口智子記)

